

戦前期中国青島市におけるクロマツとサクラの植栽

The plantation of Black Pine and Cherry Blossom in Qingdao before WW II

江 本 硯* 藤川 昌樹**

Benyan JIANG Masaki FUJIKAWA

Abstract: This paper aims to analyze how Japanese Black Pine and Cherry Blossom were imported and planted in Qingdao. It turns out that they were firstly imported to Qingdao by the German governors from Japan, and planted on the hills, along the coasts and in the parks. As Qingdao was occupied by Japan in 1914, the Black Pine and Cherry Blossom were planted more widely on the hills, parks and even courtyards. What should be emphasized is that they were not merely planted as ornamental trees, but also used to symbolize Japanese culture. The Cherry Blossoms planted along the entrance path of the Qingdao Shrine and the monument built for the dead soldiers were considered as the reproduction of Japan's traditional landscape in Qingdao. That is why when Japan was beaten in the Second World War, the Cherry Blossoms planted in Qingdao were widely cut down and replaced by Cedar. While compared to Cherry Blossom, most Black Pines were free of cut down disaster and is widely used in Qingdao nowadays.

Keywords: *Black Pine, Cherry Blossom, Cedar, forestation, park*

キーワード: クロマツ, サクラ, ヒマラヤスギ, 植林, 公園

1. はじめに

(1) 研究の目的と方法

最初からドイツの租借地として建設された青島市には洋風の建物だけではなく、樹木もヨーロッパ、日本、北米等の国々から移植された。特にドイツのアカシア類と日本の針葉樹が、初期緑化の主要樹種の一つとして青島市に植えられ、中国とは異なる景観の特徴が現れることになった。実際、日本統治期の資料によれば、植民時期には青島市に植えられた中国固有の樹種は「十分の二三位にすぎなかった」という¹⁾。樹種を輸入したのは、青島市を美化する以外にも、植民地で自国の文化・景観を再現する目的があったからとみて良いだろう。

外国から輸入された樹種のうちクロマツとサクラは最も早く青島に輸入された日本の樹種である。そして、現在でもこの二つの樹種は主要な植林用樹木、花を觀賞できる樹木として青島市の山頂、海岸、公園に植えられている。本研究はまず日本の代表的な植物であるクロマツとサクラがそれぞれいつ頃に青島に輸入され、如何なる場所で、どのように配置されたかを明らかにする。そして、ドイツ(1898-1914)、日本(1914-1922)、中華民国(1922-1938)、日本(1938-1945)に支配された青島で、これらの樹種はどのように植民文化と結びつけられ、青島市の景観構成に用いられたかを究明することを目的とする。

研究方法としてはまず、ドイツ、日本、中華民国統治期に出版された『膠州湾発展備忘録』(以下『備忘録』と略す)²⁾、『土木誌』³⁾、『青島農林』⁴⁾の中の林業、公園の建設に関する記録を利用し、クロマツとサクラが植えられた面積と場所を把握する。そして、各時期に撮影された公園、町並みの写真と照らし合わせ、クロマツとサクラは森林、公園、庭園及び並木道でいかなるパターンで配置されたかを分析する。これに基づき、各時期の市街地図を用い、都市の拡張及び重要な施設と緑地の建設とを結びつけ、これらの樹木の配置パターンと場所の変化を明らかにする。さらに、現地調査を行い、クロマツとサクラの植栽の現状を把握する。

(2) 既往研究

近年、都市の緑化が強調されるようになるにつれて、中国の公園緑地に関する研究も徐々に多くなってきた。青島の緑化樹種についても、植林、公園の樹種に関する調査が行われ、樹種の種類や多様性が分析されている。「青島市の植林樹種の選択」⁵⁾は青島市の森林の樹種の現状を調べ、目的に応じ、土の性質、経済性などのうち如何なる原則によって樹種が選定されているのかを述べている。鄭愛芬の「青島市の公園緑地木質植物の多様性」⁶⁾は青島の公園からサンプルを抽出し、各公園の植物の種類の多様性、分布、樹種の使用頻度の現状について分析している。一方、孫向麗らの「青島市における公園緑化の樹種の調査」⁷⁾は青島市の公園に植えられている植物の種類、数量と配置を明らかにした。これらの研究は青島市緑化樹種の現状を明らかにしたが、緑化樹種が輸入された経緯、植栽の形式と都市の建設・歴史文化との関係についての研究はまだ行われていない⁸⁾。

2. クロマツとサクラの輸入

1898年に「膠奥租借条約」が締結され、青島はドイツの租借地になった。青島市は海に臨み、山と丘陵が多く、自然景観は非常によい場所である。しかし、ドイツが青島を占領したときには、森林が濫伐されていたので市内の山々に樹木は全くなかった。山に土砂の流失を抑える森林がないため、市内にも雨水の浸食によってできた谷が非常に多かった。これらの谷は整地と道路の構築に難題をもたらした⁹⁾。土砂の流失を止めるために、谷でダムを造ることに加え、山々に植林する計画も策定された。一方、中国で確保した唯一の租借地として、ドイツ政府が青島を軍港と商業植民地として位置づけたほか¹⁰⁾、貿易と療養地に適当な場所として建設する意図もあった¹¹⁾。そして、「この地区が貿易と療養の適地として発展することは系統的な植林緑化と緊密に関連している」、「広葉樹が植えられたら、ここの美しい自然景観はさらに魅力的になる」¹²⁾と指摘された。植林と街路、造園用の樹木を得

*筑波大学システム情報工学研究科 **筑波大学システム情報系

るために、政府はドイツ、アメリカ、日本など他の国から樹種を輸入し始めた。輸入された樹種を試植するために、気候のよいイルチス山（後旭山・現太平山）に植物試験場が造られた¹³⁾。

1898-1899年の『備忘録』には「1898年春、青島近郊の山々に約10haの広葉樹（クリ、エンジュ、日本と山東省のゴム）と針葉樹（入手できる各種類の中国の松と日本のスギ、カワシとマツ）が植えられた」という記録がある¹⁴⁾。ここでは松の種類が記録されていないが、日本のマツが既に青島に輸入されていたことが分かる。1902年の『備忘録』には「この針葉樹は日本人に Kuro matsu と呼ばれている。」と書かれている¹⁵⁾。これによれば、クロマツは1898年に植えられた針葉樹のなかに含まれたことが判明する。

サクラに関しては、1901年の『備忘録』「第六章 林業」には「今後使える樹種は日本のある種類のサクラ、アオギリ、ハコヤナギ、ドイツのニセアカシアとキリである」と記されている¹⁶⁾。ここにはサクラの種類が明確に記録されていないが、後の日本統治期の『青島二年』¹⁷⁾に「八重」が陸軍病院に植えられていたという記述から、最初は青島に輸入されたサクラはヤエだつたと推定される。そして、これらの樹種のうちサクラが唯一の花を觀賞できる樹種であった。

こうして、イルチス山植物試験場（後旭公園・現中山公園）は青島市で初めてクロマツとサクラが植えられた場所となった。クロマツとサクラ以外、他の多くの樹種も日本から青島に輸入されるようになった。それはおそらく、日本の植物には種類が多い、気候が青島と似ている、距離も近いなどの生態と経済の理由があったと推測される。

3. 森林

(1) ドイツ統治期の造林とクロマツの植栽

ドイツは青島を占領した同年、植林計画を策定した。そのため、総督府は山林局を設置し、林業官員も配置した⁹⁾。1899年からドイツ総督府は土地を買収し、植林活動を始めた。1902年までの植林活動は総督山（現觀海山、図-2①）、ピスマルク山（現青島山）、イルチス山（現太平山）、モルトケ山（後若鶴山、現貯水山）、ディトリッヒ山（現信号山、図-2②）など青島の市区または近郊にある山地から始まり、1903年からは水源地を守るために、海泊河水源地の周辺で水源涵養林を造り、その後徐々に都市の遠

郊にある山に拡大していった¹⁸⁾。

クロマツの普及はドイツ政府が策定した巨大な植林計画と植林初期に限られた樹種と緊密に関連していたと考えられる。周知の通り、針葉樹は荒山を緑化する「遷移初期種の陽樹」と呼ばれ、荒山の環境を改善する最初の段階で多く植えられる樹種である。最初、アカマツとドイツのマツも試植されたが、失敗だったという。1903年の『備忘録』に「樹種の選択がとても難しい。数多くの試験を行い、青島に合わない樹種を取り除く。しかし、試験が特に針葉樹の試験まだ終わっていない。（中略）土が比較的よい場所にクロマツの生長状況は相当良い。しかも、石質の岩土にも生きられる」という記述がある¹⁹⁾。このように、強風にも強く、岩土にも生きられるクロマツは唯一試験成功の針葉樹として、青島の山々や海岸に植えられることになった。

図-1は1899-1909年の間、ドイツ政府が青島で造った森林の面積を示したものである。同図によれば、1900-1904年の5年間には植えられた針葉樹の面積は植林総面積の半分以上を占めていたことが分かる。このうち、1903年には樹齢2年のクロマツ1,002,400本（80.19ha）、樹齢1年のクロマツ17,000本（0.31ha）が植えられ、16kg（2ha）の種がまかれた²⁰⁾。1904-1905年の間、山々にクロマツとアカマツは18haが植えられたと記録されている²⁰⁾。1900-1902年の針葉樹の種類は詳しく記録されていないが、後の日本統治期の記録によると、ドイツにより造られた林相の針葉樹は、主に日本のクロマツと中国のアカマツであったことから、この針葉樹林の中にはクロマツが多く植えられたと推定される²¹⁾。

1906年、ドイツ膠奥地区砲兵管理部門は小鮑島山間の窪地（現貯水山の南）に移され、その周辺には1年生ニセアカシア26,400本、2年生マツ78,000本及び数万本の広葉樹と様々な花が咲いている日本の觀賞樹木が植えられた²²⁾。日本統治期に本多静六によって書かれた「青島森林の将来」には「若鶴山ノ上部クロマツニシテ高サ二乃至三間ニ達シ生長佳良ナルモ唯惜ムラクハ社殿ノ背部ニ当ル極メテ森林幽鬱ヲ要スル部分カ禿地及ヒ生長不良ナルアカまつ林ナル」とある²²⁾。この記録によれば、若鶴山に植えられたのは主にクロマツだったと判断できる。

山の緑化だけではなく、クロマツはもともと日本の海岸に自生しているので、青島市の海岸にも植えられていた。ドイツ政府は青島を占領してから早いうちに、青島は衛生状況の改善に伴い、将来皆が好む海水浴場になると予想した。海水浴場の良好な景観を創出するために、1901年からドイツ総督府はビクトリア海湾（後忠ノ海、現匯泉湾）の近くに植林し、海岸を緑化し始めた。『備忘録』の記録によると、「ここにはすべて二種類のコナラを

表-1 中華民国統治期に植えられたクロマツ（『青島農林』より）

場所	本数			樹齢 (年)	面積 (m ²)	備考
	1929年	1930年	1931年			
総理記念林	976	—	980	4	—	A
太平山	11,964	7,100	—	3	34,503	B
太平山砲台	15,500	—	—	3	27,560	B
海泊河	5,550	11,117	—	3	29,648	C
臥狼齒	13,870	33,200	—	3	24,666	C
1号砲台	—	3,261	—	2	5,802	B
2号砲台	—	55,853	—	2&3	99,296	B
3号砲台	—	48,368	—	3	86,029	B
4号砲台	—	44,483	—	3	79,120	B
万年山	—	1,207	—	2	2,148	B
觀象山	—	5,292	—	2	9,411	B
蔚兒舖	—	6,890	—	3	25,986	C
老鴉嶺	—	7,000	—	3	12,460	C
会姓岬	—	—	6,670	2	11,865	B
太平鎮	—	—	17,186	2	30,568	B
王子洞	—	—	25,900	2&3	46,063	D

注:A記念林 B風景林 C水源涵養林 D保安林
1号:会岬角砲台 2号:青島砲台 3号:小泥沱砲台 4号:ピスマルク砲台

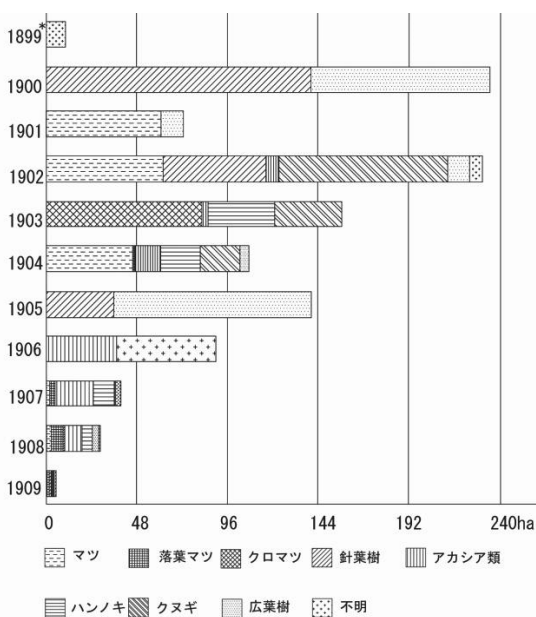


図-1 ドイツ統治期の植林面積（『備忘録』により作成）

*年は10月から翌年の10月まで

植え、ただし、葉の色を混ぜるために、コナラの外側にクリとアオギリを植えた。そして、コナラが塩を含む風に影響されないように、海に面している南側には幅 200m のクロマツ防風帯を設置した²³⁾ という (図-2③-1, ③-2)。このように、防潮・防風林として、クロマツが青島の海岸に植えられた。環境の改善に伴い、1908 年の夏には海水浴客の数は 575 人に増加し²⁴⁾、青島の海水浴場は中国で外国人に人気のある避暑の場所となっていた。

1899-1909 年の間、ドイツによる植林総面積は約 1,113.2ha に及び、青島市内及び近郊にある山々と海岸の緑化を完成させた。このうちクロマツは植林の主要樹種の一つとして、山々や海岸に非常に多く植えられていた。

(2) 日本統治期の造林とクロマツの植栽

1914 年には日本が青島を占領した。日本統治期にも植林活動は引き続き実施されていた。1914-1922 年の間には面積 741.7ha の森林が造られ、このうち新たに開拓された水源涵養林は 476ha であった²⁵⁾。水源涵養林に関しては、後の中華民国統治期の『膠澳志』(食貨志 林業)²⁶⁾によると、日本統治期には白沙河、李村河、張村河、海泊河の水源が設けられ、10 年間の植林計画が策定されたという。このうち、白沙河の水源にある官民地 9671.5ha が水源涵養林用地として指定された。植林の計画によれば、水源涵養林の樹種は主にクロマツ、ニセアカシアとクヌギであったことが分かる。1920 年にクロマツとニセアカシアを 90 万本、1921 年にクロマツとニセアカシアを 120 万本、1922 年にはクロマツなどの樹木 105 万本を植えることが計画された²⁶⁾。苗木以外にも、クロマツの種をまく計画も立てられた。ただし、支配の終わるまでの 3 年間で白沙河には僅かに 246.8ha が完成させられただけだった。

(3) 中華民国統治期の造林とクロマツの植栽

1922 年に青島の支配が中華民国北京政府により回復された。日本統治期と同様な植林計画が策定されたが、あまり実施されなかった²⁶⁾。1929 年から、青島は南京政府に接収され、直接に管理されることになった。植林活動は主に 1929-1931 年の間に行わ

れ、約 136ha の森林が造られた²⁶⁾。この中にはクロマツ林は約 53ha、総植林面積の 39% を占めていた (表-1)。そして、森林は用途により記念林、風景林、水源涵養林、保安林の 4 種類に分けられていた。記念林とは孫中山総理を記念するために中山公園の東北部で造られたクロマツ林である。この時期にもっとも多く植えられたのは風景林であった。後述のように、政府は海岸公園と歴史景観の整備を重視し、前からあった海岸の森林を整備したり、砲台の周辺に植林したりし、クロマツ林を中心とする公園を造ったからである。

上述のように、ドイツ統治期からクロマツは植林の主要な針葉樹の一つとして、青島の山々や海岸、さらに公園に植えられつつあり、青島の緑化の主要樹種となった。

4. 公園

クロマツが山や海岸に景観の背景として植えられたのと異なり、サクラは花を觀賞できる樹種であるので、公園景観の主役として配置されていた。

(1) ドイツ統治期のサクラの植栽

日本統治期に青島に赴任した泉対信之助という日本人は『青島二年』に「旭公園の桜、わけて桜大路の並木は恐らくは青島に残した施設中の白眉であらう、花の頃にはサクラのトンネルや一目千本の景色が現出する」と記述している²⁷⁾。この記述によると、ドイツ統治期には中山公園で苗圃に加え、サクラが並木として使われ、現存の南北約 1km の桜大路が形成された。また、並木の古写真によると、4 列のサクラが植えられていたことが知られるが (図-3⑧)、現在では 2 列しか見られない。

中山公園以外にもドイツ統治期に比較的密集してサクラが植えられた場所が 2 ヶ所ある。一つは総督府病院 (後陸軍病院、現青島大学付属病院) の庭であり、もう一つは総督府山である²⁷⁾。総督府病院のサクラは「八重が多い、三春を病の床に垂れ籠めて暮らす人々にとっては蓋し何よりの慰藉でなければならぬ」と記されている²⁷⁾ (図-3⑨-1)。日本統治期に病院の構内の春の花



図-2 戦前期クロマツの分布 (①~⑦) の位置図。①, ②, ③-1 は『青島古葉書』²⁸⁾より、④と⑤は <http://homepage3.nifty.com/akagaki/13-1tsingtauphoto.html> より、他は筆者撮影

見場として有名であった。総督府山のサクラは位置と背景において特別であった。青島の東北に屹立し、そこからの景色は、市街は無論のこと、付近の山々を庭の築山として見立て、また青島港や膠州湾も見られる好位置にあって、「山と海と相映する所、花時の眺めはまた格別の趣である」という¹⁷⁾。

また、上記の3ヶ所ほど密集していなかったが、モルトケ山(後若鶴山、現貯水山)の南麓にもサクラが植えられていた。前述のとおり、1906年に砲兵管理部門の周辺に様々な花が咲いている日本の観賞樹種が植えられたことから、この中にサクラも含まれていたと推測される。

以上、意外にもドイツ統治期に既にサクラが公園、病院、山で植えられ、非常に重要な観賞樹木とされていたことが分かる。

(2) 日本統治期のサクラの植栽

1914年には日本が青島を占領した。サクラはそもそも日本から輸入されたものであるため、引き続き新市街に植えられることになった。この時期に大規模に植えられたのは青島神社、忠魂碑前と司令官官邸公園の3ヶ所である(図-3⑩-1, ⑪, ⑫)。

青島神社は日本の「国家的中心」、象徴的な施設として、その創立の議が起り、調査の準備は青島が占領されたのち早いうちに始まった³⁰⁾。1919年には本社青島神社は竣工した。神社境内の植物景観で最も注目すべきは参道両側で対称に植えられた4列の並木である(図-2⑥, 図-3⑩-1)。内側の両列にはソメイヨシノ、外側の両列にはクロマツが植えられていた³⁰⁾。クロマツは背景としてサクラを浮き上がらせた。そして、日本を代表する植物であるクロマツとサクラは参道の両側に植えられ、壮麗な参道景観が神社の記念的、象徴的な雰囲気をさらに盛り上げた。はじめてドイツ統治期に輸入されたサクラはヤエであったので、ソメイヨシノはおそらく神社の参道景観を造るためにわざわざ日本から移植されたものだろう。参道に加え、1924年に境内林6,000余坪(約1.98ha)が開拓され、全てサクラが植えられた³⁰⁾。「桜樹高さ

一丈内外のもの二百一本及高さ五尺以内の物(三年生、五年生)三千七百七十七本植込みを了せしが、大木二百余本の分は悉く開花参道並木のサクラと爛漫を競う。満開の前後に亘る旬間は、団楽の家族、各種団体、同家族会、各町内運動会等始め日本在住者の観桜催しは悉く境内に集まりて甚盛なり」とサクラ満開の情景が記録されている³⁰⁾。

青島神社と同様に記念施設として、戦死した陸海軍将卒1,004名の忠魂英霊を記念するために、1916年に旭公園で忠魂碑が建設された³⁰⁾。毎年4月30日には忠魂碑の下で招魂祭が執行され、官吏や軍人だけではなく、一般市民と学校の生徒などでも参拝することになっていたという。興味深いのは忠魂碑前の参道の両側にもサクラとクロマツが植えられ(図-2⑦, 図-3⑪), 青島神社の参道とほぼ同様な景観が作り出されたことである。参道とセットで植えられたサクラとクロマツ並木の景観に、日本政府の自国の代表的な植物により記念的景観を作り出す意図が見られる。

司令官官邸公園はドイツにより造られたものであり、神尾山(現信号山)の南麓に位置していた。ドイツ統治期には総督官邸と呼ばれていた。1907年の『備忘録』「第六章 建築業」の記録によると、この年に信号山における総督官邸が竣工した。同年の『備忘録』「第七章 林業、農業と牧畜業」には信号山麓に面積が10haの公園も形成された。公園の北側は総督府の住宅庭園として使われ、南側が一般の民衆に公開されていた。公園の中には高木665本、低木1,532本、灌木51,796本、苗木56,150本が植えられた³⁰⁾。高木は主に剪定された松、ニセアカシア、プラタナスであったという³⁰⁾。しかし、第一次日本統治期の古写真によると、公園のサクラはトンネルとなるような形式で植えられていたことが知られる(図-3⑫)。これらのサクラは日本統治期に植えられたものだと考えられる。そして、毎年4月の末頃に軍司令官官邸の観サクラ会というものが行われた。軍司令官が2日に亘って市民数千名をその官邸に招待し、咲き揃ったサクラの花の下に一大園遊会を開いていたという³⁰⁾。



⑧ 旭公園



⑨-1 陸軍病院



⑨-2 現青島大学付属病院



⑩-1 日本時期の青島神社



⑩-2 1948年の貯水山



⑩-3 現貯水山公園



⑪ 忠魂碑



⑫ 司令官邸

図-3 サクラの分布図(⑧~⑫の位置図。1928年の市街図により作成。⑧、⑨-1は『青島写真案内(附官民便覧)』³⁰⁾より、⑫は『青島二年』、⑪は『青島』³⁰⁾より、⑩-1は<http://qingdaopage.com/file/00811.html>により、⑩-2は『LIFE』より、他は筆者撮影

また、青島の樹種を豊富にするため、日本政府もドイツと同様に「本邦の産のほとんどの各種の樹木灌木を網羅し」青島に持ち込んだ。そして、「青島市民に特殊の娯楽と、趣味を感得させる森林公園」の植物見本園を造った。ドイツ統治期に輸入されたサクラはヤエであるので、青島神社に植えられたソメイヨシノと林相を改善する樹種のヤマサクラも日本統治期に持ち込んだものだと考えられる²⁵⁾。

(3) 中華民国統治期のサクラとクロマツの植栽

1922年には青島の支配が中華民国政府により回復されたが、日本人居留民団体は青島に滞在し、青島神社、忠魂碑、青島病院などの施設は日本人に引き続き管理され²⁶⁾、これらの場所で日本人は花見を続けた。このように、サクラの景観と花見は青島に非常に大きな影響を与えた。ただし、当時の花見には日本人だけが参加していたという⁴⁰⁾。

日本人の花見の影響を受けたのか、中華民国統治期には中国人の間でも花見が人気になった。そして、青島の観光業を進展させ、膠州鉄道の乗客数を増やすために、1924年から中華民国北洋政府(1922-1928)は青島に観サクラに行く乗客へ安い電車のチケットを販売する政策を実行し始めたという⁴¹⁾。このような政策により、中山公園の花見は大きな催しとなっていた。開花時には全国の観光客が青島に集まり、非常に賑やかだった。そして、1920、1930年代には中国で有名な作家の多くが青島で教職に就き、青島のサクラがよく文学作品に見られるようになった。例えば、顧隨の詩「青島の第一公園(現中山公園)で観桜」、臧克家の「青島の花見」、老舎の作品集『桜海集』などを此の時期の作品として挙げる事ができる。このため、1930年代から中山公園で創出されたサクラ景観は青島市の「十大景勝」となり、毎年サクラの祭りが行われ、青島の文化の一部となった。

また、中華民国統治期には海岸景観の整備が重視され、前から海岸に植えられていたクロマツ林を中心とする森林公園がいくつか建設された。これらの公園の中でも「海浜公園(現魯迅公園)」は最も代表的な海岸公園である。中華民国統治期に青島の農林事務所によって編成された『青島農林』の記録によれば、1931年にここに前からあった松林を整えたという。そして、林相を整然とさせるために、樹齢10-15年のクロマツが729本植えられたという⁴²⁾。クロマツ林に加え、花を觀賞できるモモ、レンギョウ、シナフジなどの灌木も植えられ、階段や小道も整備され、公園が形成された。この公園は最初に「若愚公園」と名付けられ、のち「海浜公園」と改名され、1931年に魯迅を記念するために「魯迅公園」と再度改称された⁴³⁾(図-2④)。また、この時期の『工務紀要』によると、1934年には棧橋公園、山海閣路海岸公園、太平岬森林公園、小青島山公園の海岸公園が相次いで計画され、建設された⁴⁴⁾。これらの公園はいずれも元来のクロマツとアカシアの混生林を中心とし、ベンチ、あずまや、茶室、トイレなどの施設が追加されてきた公園である。

表-1が示しているように、中華民国統治期には1~4号砲台の周辺にクロマツが植えられ、砲台公園が造られた。これに関しては1935年の「青島市施行都市計画方案初稿」⁴⁵⁾に「青島はもともと農漁村であり、文化は浅く、歴史も短いので、価値のある

古蹟と名勝はそもそも少なかった。都市を装飾するため、広い範囲で古蹟を探すべきだ。本計画の範囲内、砲台、湛山射撃場、浮山前の古寺院と古樹、燕兒島の名勝などの歴史的価値を持っているものを利用し、景色を装飾するまたは公園として開拓する。」と書かれている⁴⁶⁾。こういう事情で、青島の砲台は保存されることになった。現在、青島山における砲台はアジアで唯一の第一次世界大戦の戦場として保存されている(図-2⑤)。

こうして、クロマツとサクラは公園の建設とともに、都市緑化においてそれぞれの役割を果たし、青島市で普及した。

(4) 戦後ヒマラヤスギに替えられたサクラ

1945年の日本の敗戦に伴い、青島神社も忠魂碑も取り壊された。図-3⑩-2は1948年のアメリカ雑誌『LIFE』⁴⁷⁾に含まれている写真である。この写真によれば、鳥居等の施設だけではなく、参道両側のサクラとクロマツも伐採されていたことが分かる。中国人にとって、青島神社の象徴性が強いので、施設だけではなく、参道両側の並木まで伐採されることになったものと推定される。1956年には公園の主要道路が修築され、元参道の両側にはヒマラヤスギが代わりに植えられた(図-3⑩-3)。現地調査によると、青島病院の庭にはサクラはあまり見られず、その代わりにヒマラヤスギが多く植えられている(図-3⑨-2)。迎賓館(日本統治期の司令官官邸)前の公園もなくなり、官邸前に残っている庭にもヒマラヤスギが植えられている。サクラ林は中山公園にしか残されていない。ヒマラヤスギを植えることにより、青島の市樹である新たな都市景観の特徴を造ろうとしたものと考えられる。

サクラが多く伐採されたことと異なり、青島神社の参道以外では、景観の背景として植えられたクロマツはよく保存され、現在も青島市の山々や海岸に多く見られる。ただし、1979年には青島と日本の下関市が友好都市となったため、1980年代からサクラが徐々に青島市の公園に広がっていった。そして、1994年に下関市からサクラ2,000本が寄贈され、青島の植物園に植えられているという⁴⁸⁾。

5. 庭園

青島市の美しく、調和的な景観は山林、公園から彩りをえただけではない。庭園と並木道⁴⁹⁾は市街のみどりを充実させ、青島市全体を一つの大きな公園と呼んでも良いような状態にさせたと考えられる。『青島二年』には青島市の景観について「全体において家屋の配置からその調子、それに家屋の建築に関する制限たとへば家屋の構造やその敷地、道路、庭園などの関係が、たしかに青島市街を美化するに於いて興って力ある一要素となって居るのである」⁴⁹⁾と書かれている。実際、ドイツ統治期にも日本統治期にも「青島市街建築規則」が公布され、家屋の建ぺい率が規制されていた。ドイツ統治期においては建築の面積は敷地面積の60%(中国人区は75%)以下、日本統治期に入ってからすべて75%以下と規定されていた⁵⁰⁾。古写真によれば、家屋の敷地内空地に家屋の所有者によって植物が植えられ、庭園が造り出された。

クロマツとサクラはドイツによって輸入されたものであるが、ドイツ統治期の古写真と現存のドイツ統治期の庭園に見られないことから、これらの樹種はドイツ統治期にあまり庭園には植えら



写真-1 大辰(『青島写真案内(附官民便覧)』より)



写真-2 歌仙(『青島写真案内(附官民便覧)』より)



写真-3 第24期生記念写真(『青島日本中学校校史』より)



写真-4 現青島海洋大学(筆者撮影)

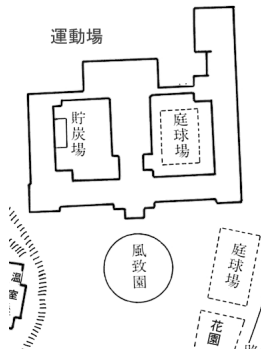


図-4 青島中学校 (『青島日本中学校校史』より)

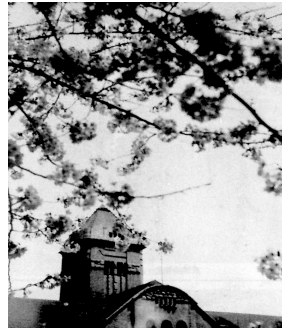


写真-5 学校のサクラ (『青島日本中学校校史』より)

れなかつたと推測される。しかし、日本統治期の古写真によると、クロマツは庭園景観の主役を果たしていたことが分かる。写真-1 に写されているのは 1915 年 1 月に兵庫県出身の坂井辰蔵によって造られた「大辰」という料理店の庭園である。入口から曲線の路地が敷かれ、その両側に庭園が設置されている。庭の左側に自然石が立ち、右側に築山が整えられ、上にクロマツが植えられていた。庭園全体には日本の枯山水の特徴が現れている。写真-2 に写されている「歌仙」という料理店の庭園にも「大辰」とほぼ同じ特徴が現れている。日本の文化で松は長寿や繁栄を表す縁起のよい木とされているから、料理店の庭にクロマツが植えられたのは植民地の青島で商売が永遠に繁栄してほしいという願望が込められていたのかもしれない。

学校の庭園にもクロマツとサクラは多く植えられていた。青島日本中学校 (現中国海洋大学の一部) は桜ヶ丘 (現小魚山) に立地し、1921 年に落成した日本人用の学校である⁵¹⁾。1935 年の青島日本中学校の配置図によれば、学校は相当広い庭園を持ち、庭の真中に風致園、両側に庭球場、花園、温室が設置されていたことが知られる (図-4)。写真-3 は青島日本中学校の第 24 期生の記念写真であり、背景には繁茂していたクロマツの姿が見られ、現在も構内に残されている (写真-4)。また、写真-5 にはサクラが写され、構内にサクラも配置されていたことが分かる。青島日本中学校は「国威発揚の文化的砦」⁵²⁾ として、立派な建物に加え、植物で日本的な景観が創出された。また、貯水山の山麓に建てられた青島高等女学校にもほぼ同様な庭園があった。このように料理店や学校に多く用いられ、クロマツとサクラは庭園の景観の中で重要な役割を担っていた。

6. おわりに

クロマツとサクラはいずれも日本の樹種であるが、ドイツによって初めて青島に輸入され、非常に多く青島の人々や海岸、公園に植えられることになった。ただし、ドイツ統治初期に樹種に限られ、クロマツとサクラは緊急であった都市緑化に合わせ、森林、公園でそれぞれ生態と観賞の役割を果たしたが、記念や文化の機能が与えられなかった。それに対し、日本の統治が開始してから、これら二つの樹種は日本政府と青島に住んでいた一般の日本人の両方によって、青島で普及させられるとともに政治・文化の意味を加えられた。日本政府の方が青島で自国の象徴を造るために、「国家的中心」であった青島神社と戦死した将卒を記念する忠魂碑を建立し、そこにクロマツとサクラを 4 列になるように植え、記念的・象徴的意味を強く表していた。そのため、統治期間の終了に伴い、施設が壊されると共に参道両側のクロマツとサクラが伐採され、ヒマラヤスギに替えられた。一方、一般の日本人の料理店や学校の庭園に用いられたクロマツは、日本の従来の生活習慣に従って植えられたものだったと考えられる。おそらく

それがドイツ人と中国人の家屋にはクロマツが見られなかった原因であるだろう。

国交回復後、中国と日本の政治関係が改善されたことに伴い、サクラがまた多く植えられることになってきた。一方、山と海岸に植えられていたクロマツはよく保存され、特に太平路に植えられているクロマツ並木と海岸のクロマツ林が一体となって、青島独特な海岸景観を構成している。

補注及び引用文献：

- 1) 田久江南 (1921)：青島要覧、新極東社発行、236
- 2) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社。『膠州湾発展備忘録』はドイツ青島総督府が作成した政府の業務報告である。
- 3) 青島守備軍民政部 (1920)：土木誌
- 4) 青島市農林技術所 (1932)：青島農林
- 5) 董運齋・于家柱・于永偉 (2010)：青島市の森林樹種の選択、国土緑化、43-44
- 6) 鄭愛芬 (2010)：青島市公園緑地木質植物の多様性、南京林業大学修士論文
- 7) 孫向麗・張啓翔 (2006)：青島市における公園の樹種の調査、当代生態農業、45-48
- 8) 公園に関する成果だが、筆者ら：中国青島市における貯水山公園の形成と変容、ランドスケープ研究集、Vol.76、No.5、421-426、2013 は新たな試みである。また、本論文は、同 (2013)：「戦前期中国青島の公園におけるサクラの植栽」、日本建築学会大会学術講演梗概集、405-406 にその後の知見を加え、発展させたものである。
- 9) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、13
- 10) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、3
- 11) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、23
- 12) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、21
- 13) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、108
- 14) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、56
- 15) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、258
- 16) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、158
- 17) 泉対信之助 (1922)：青島二年、帝国地方行政学会、108
- 18) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、210
- 19) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、200
- 20) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、381
- 21) Jork Artelt (2011)：Tsingtau, Deutsche Stadt und Festung in China 1897-1914、青島档案馆訳、『青島都市と軍事要築建設研究 (1897-1914)』、青島出版社、65
- 22) 本多静六 (1918)：青島森林ノ将来、青島守備軍民政部、15。この資料は東京大学農学部小野研究室が所蔵している。
- 23) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、209
- 24) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、602
- 25) 田久江南 (1921)：青島要覧、新極東社発行、234-238
- 26) 趙映修・袁榮 (1928)：『膠澳志』(食貨志 林業)、成文出版社、28-29
- 27) 陸蔭・徐曉梅 (2005)：青島古葉書 (1897-1914)、青島出版社
- 28) 青島市農林技術所 (1932)：青島農林、22
- 29) 泉対信之助 (1922)：青島二年、帝国地方行政学会、19
- 30) 神社協会 (1919)：神社協会雑誌、第十八号、第十二号、33
- 31) 本多静六 (1918)：青島森林ノ将来、青島守備軍民政部、16
- 32) 神社協会雑誌、第二十三号、第六号、72
- 33) 田久江南 (1921)：青島要覧、新極東社発行、130
- 34) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、540
- 35) 青島市史志事務室 (1997)：青島市志 (園林緑化志)、北京新華出版社、86
- 36) 泉対信之助 (1922)：青島二年、帝国地方行政学会、18
- 37) 和氣六郎 (1919)：青島写真案内 (附官民便覧)、青島写真案内発行所
- 38) 著者不明 (出版年不明)：青島、光陽社。
- 39) 1922 年中日「山東懸案解決に関する条約」及び附約の第七条 (甲) 日本領事館に必要な財産と (乙) 日本人居留民団に必要な財産に分けられている。乙は日本人会、化学試験所、青島病院、中学校、高等女学校、第一小学校、青島神社、忠魂碑、青島斎場、火葬場、墓地を含んでいる。
- 40) 青島市史志事務室 (1997)：青島市志 (園林緑化志)、北京新華出版社、15
- 41) 青島市志事務室 (2012)：青島市のサクラ
<http://www.qingdao.gov.cn/n15752132/n20546576/n26095442/n2614850326148580.html>、2013.07.28 参照。
- 42) 青島市農林技術所 (1932)：青島農林、117
- 43) 青島市史志事務室 (1997)：青島市志 (園林緑化志)、北京新華出版社、54
- 44) 青島市工務局 (1934)：工務紀要
- 45) 青島市工務局 (1935)：青島市都市計画施行方案初稿、11
- 46) 『LIFE』雑誌が 1936 年に発刊されたアメリカの雑誌である。
<http://images.google.com/hosted/life/7bf6591cf681616.html>、2013.08.30 参照。
- 47) 青島市青島ホームページ
<http://qdsq.qingdao.gov.cn/n15752132/n20546827/n20551440/n26245844/n26361881/26362195.html>、2013.08.30 参照。
- 48) 並木に関しては別稿の「中国青島市における並木道空間の形成」で分析している。
- 49) 泉対信之助 (1922)：青島二年、帝国地方行政学会、56
- 50) 青島守備軍民政部 (1920)：土木誌、70-72
- 51) 青島日本中学校校史編集委員会 (1989)：青島日本中学校校史、青島日本中学校校史刊行会、7
- 52) 前掲 51)、21